

土石流被災家屋保存公園

半島の火山の破壊力をじかに目にできるこの公園は、島原の人々の大切な記憶の場所となっている。

島原を襲いその光景を永遠に変えてしまった破壊的な噴火からおよそ 200 年後の 1990 年 11 月 17 日に普賢岳が再び目覚めた。噴火は橘湾地下の地震の群発から始まった。それから数ヶ月、数年のうちに、山は何回も噴火し、溶岩、火山灰雲、そして最も危険な火砕流が放出された。新しい峰である平成新山(1,486 メートル)が最終的に安定する 1995 年まで収まらなかった。

火砕流とは火山噴火の際に時々発生する熱気、灰、火山岩の混合物のことを言う。岩と灰の砕屑物やテフラは、地面との摩擦を低減する超高温のガスの薄い層の上に雲を形成し、その混合物はほとんど液体のようなふるまいを見せる。その結果、噴火中に火砕流は途方もない速度で押し寄せるように山から流れ落ちる。火山の破壊力は溶岩によるものだと考える者は多いが、火砕流の危険性の方がさらに高い場合もある。

最も遠くまで及んだのはしかし、1992 年 8 月 8 日と 14 日の両日で、大雨が普賢岳東側の土石物を洗い流し、いつもは乾燥した水無川の岸辺を完全に埋めてしまった。その土石流は海岸まで到達するとすぐに減速して後退し、最後には川岸を突破し多くの家屋を完全に埋めた。

この公園で、あなたは何メートルにも及ぶ土石流の上に立つことになる。ここには 11 戸が保存され展示されている。テントの下の 3 戸は外界から守るために、そして火砕流による被害を展示するためにここへ移動されたものである。幸運なことに、住人たちは土石流に襲われた時にはもう避難していた。

1990 年から 1995 年の噴火以来、数十年のうちに島原は復興した。今後火砕流をコントロールし管理できるように水無川の上下流に堤防が建てられ、将来的な噴火から町を守っている。